

宗何れの世何れの人か是法を貴ばざらん。人尤悪鮮し能く教ふれば之れに従ふ、夫れ三寶に歸せずんば、何を以てか狂れるを直せん。とお示しなされてある故吾々は盡未來際生を易へ身を易へても三寶を供養し敬ひ奉らねばならぬ。

而して誠心にこの三寶に歸依し奉る時は吾等は直ちに三寶の境涯となつて、一舉手一投足が其の儘佛作佛行となり、眼には正しき色を見、耳には正しき聲を聞き、突兀として聳ゆる山は清淨身と現じ、漫々と流るゝ水は廣長舌と聞こゑ、天地萬物は悉く佛法僧の三寶と露現るゝのであります。この時こそ眞實三寶の恩を報謝し奉ることが出来るのであります。

三寶の妙功德をもう少し述べたいと思ひましたが、餘暇がありませんから追て又お取次に及びます。

附録

宗教的生活

第十四席 村是の基礎

一金の節儉

「勤儉産を治め」とは戊申御詔書中の要文である。今この勤儉の字義に就て一應話しておくことであるが、「勤儉」とは勤は勤勉精勤と熟して仕事を勤むる意である。儉は儉約節儉と列ねてつゞまやかといふ意で、俗に締りを付るといふのである。今一つ平たく申せば、勤儉といふは働ながら無駄づかひをせぬことであつて、いかに働くがよいと申しても、働きて金銭をためたばかりでは働いた所詮はありませぬ。働きためた金銭は遣ふのでよいのです、さりながら無駄につかふてはならぬ「キタナクダメヲウツクシクツカヘ」と云ふ語がある。是れが勤儉實行の意味である。或人の歌に、「世の中は喰ふていだして寝て起てさて其後は死ぬ計りなり」とありますが、成程面

白いことです。喰ふばかりで二便が通じなかつたら病人でありませう。喰ふては通じ喰ふては通ずるので、健康體といはるゝのである。されど無茶苦茶に通ずるのみなら大騒動である。勤勉して出来た金銭を遣ひ、又勤勉して遣ふので、健康の世の中となるのです。遣ふのでよいのだと聞て遣ふのみであつたら經濟の赤痢で大騒動となる。乃て私の考へには是非共中産以上の人はこの喰ては出し喰ふては出すといふ妙教を信じて行ふてもらひたひのであります。そうでない世の中に活氣を生ずる時がないのである。又私共の身に引受て實際勤儉は如何致せば宜しいか、一言に申しますと、桶の輪を締め底の抜けない様にして、水を汲めば宜いと云ふ譯を知らねばならぬ。水を汲むのが勤て、桶の底を抜かぬのが儉と云ふ。乃て勤ありても儉なき時は底のなき桶に水を汲むと云ふ類にして、勤の功がない事になる。又儉ありても勤なき時は輪のしまりた底の丈夫な桶に水を汲まぬ様なもので、儉の益はない事になる。勤と儉とははなれぬ様、鳥の兩翼の如く、車の兩輪の如く行はねばならぬのである。

世間には儉約といひながら吝嗇を實行して居るものが多い様に思はれます。吝嗇は事の有益無益に拘らず、都て金銭を出すことを吝むので、出すことなら手一本出さぬ

と云ふ。なぜなれば手を出す袖口がいたむと云ふ様な工合で、なんでも一度入れたらもう出さぬと便秘主義の病人金持である。俗にシワン坊又はケチン坊といふのである。故に儉約と吝嗇とは性質が違つて居りながら、混交し易いものであります。今年から儉約を實行するから祭禮にお客を招かぬ、法事に引菓子を廢す、そのくせ家内丈氣樂に呑べば可い、喰へば可いといふ、調子、何と間違つた事ではありませんか。これ全く儉約と吝嗇を混雜し、名は儉約にて、その實吝嗇を行ふて居るのである。

西洋に吝嗇家があつて、どうも俺はまだ修行が足りない、都會に先輩がゐるさうなが、一つ聞て來やうと、内を出た。さうしてその家を探ねると「ア、よく來て呉れた君は御飯はすんだかい」「イ、ヤ、それなら一緒に食へに行かう」と連れ立つてパンやへ行つた「あゝ柔かいパンがあるかい」「はい、丸るてバタのやうなのがあります」「ア、さうかそれならばバタにしやう」と、牛酪をうる家へ行つた「オイ上等のバタがあるかい」「はい、丸て油のやうなのがあります」と云はれて「何ぢや油のやうなのがあるては油の方がい」と油屋へ行つた「オイ、油の上等なのがあるかい」「はい、水のやうな透明なのがあります」「水のやうなだとそれでは水の方がい」と二人は

とら／＼水道の水をがぶ／＼飲んで飯のかわりにしたので、成程これでこそ先輩だと感心して歸つたと云ふ事である。

此れは不出主義を實行したので、前の儉約と吝嗇を取違へたものよりも、また悪い出すことならば親が死でも手紙一本出さず、遣ることならば醫者の藥禮も遣らぬ。是等は勤儉治産を吝嗇蓄産に誤解した人で、彼の守錢奴といひ、金の番人といふは是等の人をいふのである。

私の見知りの者が或夜提燈持て道中して居りました。處が後より提燈持ち乍ら、追付て來たは隣村の某と云ふ者であつたさうです。隣村の某は追付なり自分の持て居た提燈を消して、先の人の提燈の餘光を借て道中し、別れる際に錢を出して曰く「貴殿の提燈のお蔭で此處まで參りました、難有存じます。これは蠟燭代であります。お受取下さい」と云ふと、先の人は「私は君の爲めに別に提燈を點したるにあらざれば、この様な蠟燭代を貰ふ譯はない」と云へば「左様でない貴殿の提燈がなくば私の提燈は消すことならぬ。幸貴殿が提燈を持て居られしゆへ提燈二つは無益なことゝ存じて、自分の提燈を消したことであるから、之を受取て下さらねば私は吝嗇になる、私は節儉

は致せども吝嗇はいたさぬから、是非この金を受取下され」と云ひしと、此話はその常人より私が直に聞いたことであります。如何にも最もな話である、この道理が知られましたら、節儉は飽まで致さねばならぬが、吝嗇は深く戒むべきことである。儉は福をうみ吝は禍を招く。蟻の如き小虫すら尙貯蓄の念あり。況や萬物の靈長たる人間に於ては常に纒の金錢でさへ貯蓄が必要と心掛けねばならぬ。

古き話にも障子の破れを繼張して居た貴族某に「貴方は其様な面倒をなさらずに總體を張替させなすつたらよからう、手間も掛らず奇麗に成てよろしいでせう。」と申した者が有た。然るにそれに答へらるゝに「若し羽織袴に疵を生じた時、繼ぎをあてるは面倒にもあり見醜くもあるから、新調するが宜しいとて疵の羽織袴を引裂てすてますか」と云はれた。此一言に赤面したとの事である。些細の事と思ふても古き諺に、「塵も積れば山となる」と申す如く心を用ゆるに油斷してはなりませぬ。是に就ていよ／＼少しの善根たりとも捨てゝはならぬ。僅かの罪惡たりとも取てはならぬと云ふ心を付て道徳心は養はねばならぬことである。

昔元龜天正の頃英雄が諸方に起つて、互に鎬を削つたこととしたが、其中に堀久太

郎秀政といふは、偉い一方の名將であつた。或時その召使ふてゐた侍に何か不届の所行があつたといふので、秀政は涙を揮つて之を勘當し、國拂ひを命じたが、然るに其侍が力なく「スゴク」出て行く姿を見て秀政思ふやう「彼は定めて貧窮であらう苟且にも秀政か所に奉公してゐたものが、路頭に迷ふてゐるとあつては家の面目に係るといふもの、見捨てられぬ」と直様近侍の士に命じ、之に小判百兩を持たせて其侍の後追ひ驅けて之を渡さした。そこで近侍の士は追驅けて之を渡し、歸つて秀政の室に入り復命せやうとすると秀政は頻りと何かしてゐられる。何事かと視ますると百兩の小判が包んであつた一枚の紙を頻りと皺を延して奇麗に疊んでゐられたとの事であります。

どうです、既に勘當して何處の骨になるやら知れぬ侍にも一家の面目を重んずる爲には小判百兩も更に惜まず與へてしまふ、紙一枚は決して疎かにせぬ、大切に皺を延ばして保存して置くとは、いかにも戰國の時代に一方の名將だけあつて、其心の用ひ方が尋常でなかつたことが知られませう。僅か紙一枚、その價からいへば何でもない併しこれを疎かにせぬといふ心掛け一つで、身も立ち、家も榮え、大きな事業も成功

する。然れば儉約とは無駄な金銭を使い、虚榮のため身分不相應な奢りをせぬ事て、天の恵みを忘れて、紙一枚でも猥りに破つた時は、己が持つてゐる福分をそれだけ剝去つたのであると思ひ、それには平生「入るを計りて出るを制す」といふ經濟思想を失はぬ様に心掛けるのが最も肝要である。

## 二 精神の節儉

近頃は世間一般驕奢に流れて來たので、追々何事にも節儉法を唱ふる様になりまして至極結構ですが、未だ大切な精神と時間の節儉法に心付た人は少いかと思はれますそんなら私は精神の經濟を得て居るかと言へばさうはゆかぬ。今尙修養中でありませうが、凡そ人間の最も大切なものは精神である。人は萬物の長といふのは身體の上ではない。精神の萬物より優れて居るからである。世間の人が斯る尊い精神を無益に費やし、入らぬ事に心を勞するものが多い様である。是れが不經濟の第一であります乃で精神上の儉約とは「下手な考へ休むに如かず」で、平生成るたけ心を無益の事に使はず、無駄な心配をせぬ様にすることである。

ある處に一人のちんばが居りましたが、口さがない京童がその跛の通るのを見て「あ、跛が跛が」と云つて笑ひましたので、内へ歸つて妻君に「今日子供が跛々と云つて笑つたが本當に己がちんばかい」と云て聞きませすと「何がちんばでありますものか右の足が少し短いただけです」と言つた「そうかそれならよし」と云つて安心して居りましたが、或日外を歩いて居りますと、また子供等が見つけて「あ、跛が跛が」と云つて笑ひます。「何がちんばだ跛ぢやありませんか、右の足が一寸短いただけだ」と云つて怒りました。「さあその足の短いのが跛だ」と云つて子供等は承知しない、そこで今度はある物知りの老人の所へ行きまして「手前の家内は右の足が短いただけで、ちんばじやないと申します、近所の子供等はそれだからちんばだと申しますが、一體どちらが本當でありますか」と尋ねますと「そりやお前さんちんばでも無ければ、右の足が短いでもない、左の足が一寸長いただけだ」と云つた「あ、そうですかそれ安心しました」と云つて居りますと、或日また候子供等が見付けて「あ、ちんばがちんばが」と云つて笑ひます。「何が跛だ跛ぢやありませんか左の足が一寸長いただけだ」と云つて辨解しましたが「さあその左の足の長いのが矢張りちんばと云ふのだ」と云つてドツと

笑ひます、これはどうも不都合な話で一つお寺の和尚さんに伺つて見やうと云ふもので、俄にお寺へ参りまして「方丈様どうも御無沙汰をいたしました、時に近頃子供等が私にちんばだくと云て困りますが、家内に聞いて見ますとちんばぢやない、右の足が少し短いただけだと申しますし、物知りの八公に聞て見るとそうぢやないたゞ左の足が一寸長いただけだと申しますが、一體三つどれが本當でございませうか」と尋ねますと、和尚「エッヘン」と一つ咳拂ひを致しまして「そりやお前さんちんばでもなければ右の足の短いのも左の足の長いのも無い、たゞ兩方の足が不揃なだけだ」と云つたと云ふ話があります、右が短いと云ふても、左が長いと云ふても、また兩足が不揃なと云ふても、結局同じこと、矢張り歸する所はちんばであります。それに子供にまで愚弄にせられて彼地此地尋ね廻つて無駄な心配をするとは、實に氣の毒な男で精神の經濟を知らぬのである。

精神の經濟とて別に六ヶ敷う理屈は入らぬ。釋尊は「心を一處に制すれば事として辨ぜずと云ふことなし」とお示しなされてあれば、心を常に有用な方に集中して、或一つの目的の爲めに使ふやうにするのである。己れの仕事と、己の精神と別々にせ

ぬ様にするが肝要である、禪宗には「擔板漢」といふ語がある、此れは支那に大きな板を擔うた男が賑かな町を歩いて「ア、此の町は賑かな町だが片町とは惜しいものだ」といつたといふ話して、これはその筈、板を擔いて居ては一方を見て兩方を見えない事であれば、即ち一方むきの男といふ事、此れには善悪があつて自分の職務に就ては一方向きに脇目をふらず勤勉するは善いが、他人の事をいふには兩方を見ねばならぬ精神を己が職分の爲めに集中するといふ事は、一方向きの擔板漢にならねばならぬ。書物を讀む時精神を集中して讀めば「眼光紙背に透る」と申して、その文字以上の意味を讀み得らるゝが、左なくは書物の文字さいぼんやりとして解らぬ、算用をする時は、精神が丸で算盤の中に這入つて居らねば、本當の精算は出来ない、耕作をする時は精神が鋤鋤の中に籠つて居らねば満足な收穫は得られぬ、斯様な意氣込で物事に一心になつて遣る時は柳は緑り花は紅に、物をそのまゝ扱ふから間違ひなく成功する。禪宗では「三昧」と云ふ語がこれで、三昧とは「その物になりきる」と云ふ事、物と我と一つになつて仕舞ふから物事の真相をそのまゝ見て取る事が出来る。禪學の眞意もこゝにあるのです。虚堂録に「鹿を逐ふものは山を見ず、金を攫むものは人を見ず」

と味ふべき語である。

昔今のやうな汽車の交通もなく、郵便の便利もなかつた時代には、飛脚といふものがあつた、所が江戸から京都へ行く飛脚に一人の大へん足の早い男があつた、この飛脚はもう大ぶん年を取つてゐるがそれでも若い者も叶はぬ早さである。何時も此飛脚は他の飛脚よりも四五日は早く着く、それで或時この老飛脚に向つて其秘訣を授けたいと願つたれば、老飛脚は笑つて言ふには「別の事ではないが東海道には赤い石がある、其石を踏むと足が疲れて遅れる故、なるべく其石を踏まぬやうにさへすれば必ず早く着ける」と答へた、これを聞いた飛脚はそれではと言ふので今度は赤い石が無いかと探しく、東海道を歩いたが五十三驛とも終に見出すことが出来なかつた、然しいつもより二三日早く着いた、歸りにも是非赤い石を探し出さうと探しく、歩いたがとら／＼見出すことが出来なかつた、併しいつもよりは二三日早く着いた。その後老飛脚脚に逢つて其事を話すと「赤い石と別に何もあつたのでないが、お前が足元を見て歩いたので早かつたのだ、早く行く秘訣は足元に氣を付けることである」と言つたのである。

是れはたゞ東海道の旅ばかりではない、すべてのこと先づ其一步々の足元に注意して、千里の旅も一歩々々によつて成し遂げらるゝことに氣を付けねばならぬ、精神の集中はこゝにあるとしたら三昧といふもこの老飛脚の足元にあることが解るであらう。

板倉重宗は江戸幕府初世の名臣である。勝重の子で父に繼いで永く京都所司代といふ重職を勤めた（所司代といふは將軍の代官として禁闕を守護し、近畿地方の政務を總攬し又事あるに際しては、附近の諸大名を指揮して軍事を統べるといふ大任であるが重宗はよく其職に協ひ善政美蹟の類頗る多い）重宗は所司代を拜した後毎日決斷所に出る時西面の廊下で遙かに神を伏拜ひのを常とした、又決斷所には茶臼が一つあつて、障子を引たて、其内に座り手づから茶を挽きながら訴を聞いた、されば誰れしもこれを不審に思つて居たがはるか程経てのち或人がその譯を聞くと重宗のいふには、まづ決斷所へ出る前に廊下で遙拜するのは、少しく所願あつて愛宕の神を拜ひので、所願といふは別のことでない、今日重宗が訴を裁判する時心の及ぶ限りは私の情を挾むことはしない積りであるけれど、萬が一にも過があれば、即座に我が命を召さ

せ給へと祈るのである、また人の面貌には憎らしいのもあれば愛らしいものもある、愛らしいものゝいふことは偽りことにも誠らしく聞え、憎らしいものゝいふことは誠のことも偽りの様に聞えるゆへ、いつそはじめから容子を見ないに限ると思ひ、かねて障子を引立てゝおく。茶を挽くのは吾が心の動靜を試みる爲めて、茶を挽いてその細かに落ちる時は心が靜かな時、粗らく落ちる時は心が動く時である。凡そ訴訟を聞いて曲直を明らかに辨へ兼ねるのは心が動く結果であるから、挽茶の精粗いて自分の心を慮るのであると答へた。政事に心を用ひること、この様であつたから従つて成績も擧つたであらう」と思ふ。

重宗は實に職務と運命を共にし、斯の職務の爲めに死を決したる眞心は、「忠實業に服す」と申すのである。斯様に申すと「忠實業に服す」といふは國家に一大事のある時は勿論平生も職務と共に死ぬのが趣意の様と思ふ人があつてはならぬ。決して死ぬのが能事ではない職務の爲めには假ひ死ぬ程の困難に逢ふとも毫も變心せず、たゞ一生懸命に職務に力を盡すのが、忠實業に「服す」といふのである。されば我等が最初克く職業を撰み、此の職業こそ自身に適當と思ひ定めたなら、深くそれを信

じて餘所目をふらずどんな困難に陥るとも、毫も變心せず最初の目的を達するのが忠實三昧であります。

### 三 時 の 節 儉

西洋では「時は金なり」と申して、時間を空く費す事は恰も無駄に金を費ふ様なものであるとて時間を貴重に視て居ることであるが、金は費つて仕舞ふても又之を取返す事もなるが、時間は假へ一時間でも費したら之を一生涯取返すことは出来ぬのである。故に金よりも時は貴いのである。もう一層委しく云へば世の中で寶を算へて見れば、その數は多い事でありませう、金錢も寶である、食物も寶である、田畑も寶である、家庫も寶である、衣服も寶である、名譽も寶である、學問も寶である、智慧も寶である、何れも寶には相違ないが、是等は一度失ふても亦得らるゝ事がある、諺に「七顛ひ八起き」と申して七度失敗しても八度目には勝利を得る事があるが、一度失ふたら再度得難いものは時間である。時計のチン／＼の音が耳に聞ゆる一つ／＼の音一つとして再び得る事の出来ぬ時間の逃ける聲である、今年今月今日の今時は一度去たら

無量永劫盡未來際の末まで再び取返す事の出来ぬ時である、斯く得難い至重の妙寶を何とも思はず浪りに費すは實に勿體ない事である故に古人は「尺璧寶に非ず寸陰是れ競ふ」と云はれた、何人でもこの金言は常に忘れぬ様に心に銘じておかねばならぬ。昔徳圓といふ有難い老僧がありました、其寺の檀徒に有名なる富豪があつて、主人は佛法嫌いでありましたので、老僧は何とかして佛法に引入れ度ものと兼々心に掛てゐられた、或時老僧は「お前さんは何が一番樂みてす」と尋ねたれば、富豪の主人が「私は物の殖えるのを最上の樂みとして居ります、先づその一二を擧ますれば、學校に通ふ子女は教育によつて日々智識が殖える是か一つ、貸て置く金錢は日々利息が殖える是か二つ、苗代に蒔た黍は秋に一粒萬倍と殖える是か三つ、この様な樂みはありませぬ」と答へた徳圓老僧は「御尤もなことだ、お前さんは殖えるものが澤山あるけれども、只一つ日々に減るものがあるのを忘れて居らぬか」と尋ねました、主人は私はその様な物はありませんと云ひ切つたから老僧は「お前さんの子女よりも財産よりも大切な一つの生命ばかりは去年よりは今年は減り、前月より今月は減り、昨日よりも今日は減り、朝よりも今は減つたのである、それを忘れて居らる



いとは不憫千萬であると教訓されたのが主人の肺腑を貫きまして、終に求法の人となつたといふ美談がある。

我宗祖承陽大師は「命は光陰に移されて暫くも停め難し」と仰せられてあることを徳圓老僧は事實の上に教訓せられたのである。然るに我々は毎日毎月毎年、月日の命終する有様は眼に見ながら之を我身に思ひ比べて見ぬとは、實に迂濶千萬のことである。況て月日の命終すると云ふも餘所事ではない、一日立てば一日我命が縮り一月立てば一月、一年立てば一年と月日の命終するに従つて、我命が縮つて来る、思へば實に果敢なき次第である。

乃て私は「時は金なり」どころではない「時は金以上で時は命也」と信じて居ります。私が先年（長壽の秘術）と記せる一本をみるに「徒らに眠らず、徒らに遊ばず、他人の眠る時間や遊ぶ時間を學問及事業に使はせ、他人の五十年仕事する時間に百年の仕事をして爲し能ふは必然なり、是れ即ち長壽の秘術なり、たとひ遊ぶ或は眠る時長の長命ありとも用なきは生き甲斐なきものにて死人に齊し」とありました。されば「時は命なり」之を空く失つたものはむだにそれ丈生命を縮めたのでこれほど大へんな不經

濟はあるまい。我國の人々は此の不經濟を何とも思はずに居りはしませぬか「時は石瓦なり」であります。五厘錢が落ちて居れば走つて拾ふてせうが、石瓦が落ちて居たら夫こそ見向きもせぬ。この時の浪費を更めねば日本國を富ます事は出来ませぬ。従事の會議集會などが午前十時の觸れ出しに、十時に来るもの少く早きものが十二時、遅きものは午後一時二時に来るといふ習慣である。それがために約束の通り午前十時に来た人の手許に取ては凡そ四時間の徒消となるのである。約りお互に餘りな事だ、長く待たせるにも程がある位の、獨語に了るのである、中には人を訪問しても中々用事を述べないで二時間も三時間もむだ話をして居る、直に用を言へば五分か十分で済む或は半日も居て主人を困らせる人がある、この種の人には雷に己れの時を棄てるばかりでなく、他人の時を棄てさせに来る、聞けば外國人はそこになると感心なもので、五分間計りお邪魔をすると云へばチャンと五分間で止める、十分と云へば十分ときまりがある、吾國民もこれ迄の弊害を除いて時間の節儉法を實行仕様と思ふなら、西洋時間間に改良したいものである。學問技藝、金錢米穀、動産不動産等、凡ての物を産み出す無盡藏は時間であるから、此の時間を相互に活用して國利民福を得る様に勤勉致

いねばならぬ。

勤勉の人は萬物を化して黄金となす術あり光陰といへども亦之を黄金に化すべし

(ロングフィールド)

節約の要道は小利に意を注がんよりは小費を省くに如かず

(ペーコン)

如何に金を造るべきかを考ふるよりも如何に金を費すべきかを定むるのが困難である(カーネギー)

一日作さずんば一日食はず

(百丈大智禪師)

田の草は主人の心一つにて

米ともなれば荒地ともなる

(二宮尊徳翁)

天津日の恵み實は無盡蔵

鐵で掘りだせ鐵で刈りだせ

(全)

極樂はいつくの果と思ひしに

家業精出す正直の門

(一休禪師)

### 第十五席 忠實業に服し

#### 一 實業家の模範

富田高慶といふ學者が二宮先生の芳名を慕つて、その門を叩いた、時に二宮先生と富田氏との間に取替はされた初對面の挨拶が頗る面白い。先生が富田氏に向つてお前は豆といふ字を知つて居るかとの尋ねてす、誠に奇妙な質問でせう、之れが無學文盲の田夫野人に向つてもあるならばいざ知らず、兎も角も一門の立派な學者先生に對して豆といふ字を知つて居るか、とは何方がお聞きなされても不思議に感せずには居られますまい、高慶先生も流石に暫は茫然としてお答ひも出来ませなんだが、さればとて知りませぬともいひ兼ねて、いかにも存して居りますとお答ひをしたのです、ところが二宮先生がそれならば書いて見よと仰せられて紙と筆とを渡して呉れました高慶先生愈々怪訝に堪へませぬけれども、今更否むことも出来ず、筆を執つて立派に豆と云ふ字を書いて先生の前に差出されました、先生つくづく之れを御覽なされて學者の書いた文字は、實に見事であるが、私の書いたのと比較して、遠慮なく其の優劣

を云つて貰ひたいと仰せられて、近侍のものに命じて實物の豆を取り出させました。高慶先生益々窮して口の開きやうがない、さうでせう、筆で書いた豆と實物の豆とは元々種類の異つたものです、その異つたものを並べて優劣をいへなどは、實に矛盾も甚しいので、論理學などでは随分八ヶ間しくいふところなのでせう、實に高慶先生も當惑したのです。ところが二宮先生は無難作にも之を見てお前に解らなければ之を解らせるものがあるといはれて、一匹の馬を曳き出さしめ、その前に今の文字で書いた豆と實物の豆とを置かれた、すると馬は遠慮も會釋もなく、早速實物の豆を頂戴して、高慶先生の書かれた豆をは一向に顧みもしない、茲に於てか二宮先生が徐ろに高慶先生に向つて云はるるには、お前が疊の上で作つた豆は、馬も喰はぬが、私が粒々辛苦の手作の豆は、喜んで之れを喰ふ。學問も恰度その通り實地に人を救ひ世を導くてなければ役に立たぬものであると懇々として諭し下されたので、高慶先生も今迄自分が他人の寶を數へるやうな學問ばかりして居たことを深く悔いて、直ちに二宮先生の門下に投じて、机上の空論や疊の上の學問を放擲して、實地の活學に従事し、二宮門下の高足として後世に名を残したといふことであります。

## 二人力車夫の模範

山本辰次郎と云ふは、大津の町では徴税割にすると貧富の度から二十三等に分けてあるとの事でありませう。その中の二十一等目に當る極貧な人力車營業をして居る貧民であります。先年血の出る様な中から十圓紙幣を郡長の處へ持參し、之を濟生會に寄附し度いと云ふた。處が郡長さんも驚かれて濟生會と云ふのは「お前たちの様な貧民を救ふのが目的である、夫れにお前方の様な難儀な人に金を出しては、濟生會の本意でないから、持つて歸つたがよからう」と諭されました。處が右の辰次郎は屹と形を正し、兩手をついて申すには「成程仰せの通り私は人様の厄介になるべき貧乏人て御座います、けれど畏くも天皇陛下が我等が様なあはれなものを憐ませられ、下だし賜はつた御趣意から、濟生會が出来たと云ふ事ですから、吾々如き窮民も其の御趣意を奉戴せずには居られませせん、私は是れでも日本臣民の一人ですから」と、其儘十圓紙幣を置き去りにして歸つたと云ふことが新聞に見えて居つた事があります。こう云ふ感心な人も御座いますけれども、夫れは百人の中一人も有るかなきかの逸事でありませ

す。其後辰次郎は、戸主を譲受けねばならぬ事になりました。辰次郎の父さんは不幸なもので、辰次郎に戸主を譲つた時は唯借金があるばかり、外に何も譲る事が出来ないのでありました。其上中風に掛り腰が利かぬので、毎日寝て居つて看病を受けて居る位で、家事の手傳と云ふては轉んだ火箸も起すことが出来なかつたのであります。夫れに辰次郎の手一つで二人の妹をも相應に他へ縁付ける迄にして父を介抱仕ながら生活を立て、行くのですから、車を引いた位では容易に出来るものでありません。夫れ故父親は辰次郎の骨折や苦心を心にくみ分けて、我子ながら心の中で手を合せて拜んで居るのです。けれども老の愚痴で時々云ふ事を云ふ「己れは一生に一度西國三十三番の札所を巡り、處々の靈場を拜み度いと思つて居たが一生涯な事もなく金も日間もないところから、遂其事を果さずに仕舞つた。今こうして中風に掛つて全身不随となつて見れば、もうとても駄目だ。誠に残念なことを仕た」と折ふし枕許に音づるゝ人のある時に話をする、それを辰次郎はこなたの方で聞きながら、自分にも遺憾に思ひました。樂みとしては此の世になきものを、思出して言はるゝは無理もないと思つた。其處で非常な奮發をして又となき一人の父親の心を満足させて遣り度いと

心の中に一大誓願を立て、假令此身は寝る目もねずに、一人前の仕事は二人前しても此企望だけは満足させる事にしました。夫れから父に知らさず二三年の間は夙に起き夜半に寝ね、雨にぬれ風に吹かれて夢中になつて働いた。人の一心と云ふものは恐ろしいもので、漸く西國を巡る丈けの路用も出来ました。其處で或日父に是迄の苦心を物語り、父が辭退するをも聞かず、父を車に載せて自から引き子となり、父と二人で三十三番の札所を巡りました。車の通はぬ處は負ふて行く、父も大層喜びました。處が最早盛夏の頃となり、日中の旅行は暑くて骨が折れます、父は少しく退屈をして「こゝらしてお前の御蔭で、札所を方々巡り来て、既に半ばになつたけれど、まだ残りが澤山ある、是れを皆んなまはればよいけれど、己れも大層疲れて来た、お前もさぞ暑いであらう、だから一度家に歸つて暫く休み、また秋の涼しい頃になつたら出掛けやうぢやないか」と申しますから、辰次郎も父の意に順ひ一旦家に戻りました。然るに其夏も既に過ぎ、秋の空も高くなつて、そろそろ出掛ける頃になると、父は急に容態あしくなり、日増に望みも少くなり、哀れ其事も果さずして、終に他界の人となりました。辰次郎はいとも残念に思へど力及ばねば、泣く泣く野邊の送りもなし、佛事法要も鄭

重に勤めましたが、日頃の望みを果さずして、こう云ふ事になつたのは、父もさぞかし残多からうと云ふので、今度は父の位牌を負ひ、残りの霊場を自分獨りて巡つて来たとの事でありませう。死に仕ふるは生に事ふるが如しと、此辰次郎の様なものを云つたのでせう。現在生きて居る人に向つてさい蔭日向があるものを、此辰次郎の様に死んだ後にも反右にせぬ行は、實意と云ふものがなうては出来ません。

### 三 小學生の模範

孝女名は迫田みき子、今年八歳になつたばかりである。鹿兒島縣川邊郡東加世田村唐仁原迫田與之助長女として生れたが父與之助はみき子二歳の時に死亡したので、母の女の手に一つに貧しき暮の中に生育せられた。宿因拙かつたか母子二人辛き浮世を泣き明した。みき子五歳の頃より母は慢性れうまらずに病んで起居の自由を失ひ、其上眼病を患つて右眼に僅少の光を認るのみとなつた。貯もなき家計は其日の烟さへ立ちかぬるまでになつた。家族としては外になき憐なみき子は、只獨り矮少な體を働かして朝夕の賄ひから病母の看護、さては洗濯物までなして居た、或時など洗濯をしたもの

の子供の力では、水を絞り得ず、小さき手に載たまゝ小川から歸つたことすらあつた。又日に依つては三度の食事に分量が不足することがあつた。その時は母の眼の見へぬのを幸に、自分は食はないて母のみにすゝめ、自分は饑を忍んで食事を終つたと告たこともある。日に二度食つて終つたことも幾度もあつたらしい。斯くする中に學齡に達して學校へ通ふたが、唯の一日も缺席をしたことなく遅刻や早退など願つたことなく其上成績が優良である。學校職員も最初から通常の子供でないことを認めて居たが篤行者として社會に表彰してはまた八歳の子供に多大の責任を荷すから、將來の成行に注意を怠つてはならんと、互に語り合つて居つたところが、三月進級試験の頃母の病は非常に不良を告た。寸時も看護を怠つてはならず、それで傍から離れられぬことになつた。然し學校はと云へば一番大切な試験の前、みき子が小さき胸の苦悶の最頂に達した。我家の戸口を出て學校に行かんとしては後戻り、亦出ては戻る、數回往き來しては苦んだ、幸ひ家が學校の近く故放課毎に家に走せ歸り、母を慰ては亦學校に參り、斯くて無事に優等賞を得て二年生になつた。嗚呼實に同情すべき菩薩の様な少女ではないか。是を知つた學校教職員は今躊躇すべき時でない、直ちに之れが表

彰式を行ふた。みき子の篤行が新聞に記載さるゝと共に、同情に富める慈惠品が遠く北海道や大阪から送られて、總額三百圓に近くなつた。其他種々の物品や子供の手紙は毎日来る役場員や、有志者が親切に世話してくださる、斯くと耳にした菩提所の住職は檀家の一人に篤志者が出た嬉しさは、例へんにものなく、去る明治四十四年四月降誕會の親修をした席で、旌表式を擧げた。學校長の紹介でみき子は八歳の可愛き體を壇に立つた、校長は同女の篤行を話されつゝ中途からは語る者、聴く者、さてはみき子自身も泣き出した。此日みき子の着物も海老茶袴も一切篤志者から送つて來た惠の露で飾られました。

#### 四 忠馬の殉死

齊光號と云ふ馬は九州某師團の騎兵上等兵吉井政男と云ふ人の乗り馬であつた。政男は先年入營した際、己れが乗用として此の馬を下附されたのである。爾時から朝夕の手當ては云ふに及ばず、何事につけても誠のあらん限りを盡し恰も骨肉の様に愛撫を加へて居つた。處が明治三十七年春端なくも日露の間に戦端を開かれたので、吉井

上等兵も多年來馴した齊光號と共に、遠く滿洲の野に渡り、此處に激戦、彼處に逆襲大小幾多の戦場に蹄の音勇ましく轟かし、微傷一つ負はずに偉大なる軍功を樹つる華々しさ、敵も味方も天晴れの武者振りよ逸物よと賞め立てれば、政男は齊光號の賞めらるゝのが我身我手柄を謳はるゝよりも嬉しく、萬事意に任せぬ戦場に於てさへも、乗馬の手當ばかりは毫も怠つたことがなかつたが、かれこれする内に沙河の大戦が起つた。頃は明治三十七年十月十五日、政男は日頃の勇氣百倍して、すらりと齊光號に跨るや否や、獅子奮進の勢を以て敵陣深く切入つた。敵も必死の覺悟であるから、此の會戦の激しさは物に譬へん様もない。見る見る屍の山を築き、血潮の川を爲すと云ふ有様、此日政男は軍旗保護の任務を帯びて、師團長の側に控へて居たが、圖らず一弾空を裂いて飛び來り、頭上に於て破裂した、何かは以て堪るべき、政男はあつと一聲馬より落ちて壯烈無比の最後を遂げた。

斯くとも知らぬ乗馬は忽ち跳り上つて半丁以上も駆け過ぎたが背に主なきに驚いてか狂氣の如くに取返し、例れし主人の軍服を啜へて起さんものと焦心つゝあつた。されど政男は已に絆切れて砲煙彈雨の間に恨を吞んで居た、馬は悲しき聲を張り上げ

て尙ほも揺り動かして止まないのである。其斯きに驚き他の一兵卒が駆け来て政男の死體を收容し、後方の村落に手厚く葬つたのであつたが、齊光號はそれより主人の墳墓を離れず、糧も食はねば水も飲まずして六晝夜泣き暮し、泣き明した揚句肉落ち氣衰へて終に政男が初七日の夕、哀れ主人の墓前に果敢なき最期を遂げた。嗚呼「如是畜生發菩提心」實に大和武士にも優つたものである。今之れを見聞せし人々は一入哀れを催ふして、最と懇ろに主人の墓側に葬つて「嗚呼忠勇なる齊光號」と書したる墓標を建てたとの事である。

### 五 忠馬能く主人の危難を救ふ

馬が他の畜類に優れて性あることは今に初めぬ事ながら、此の如きは珍らしき事、去る明治三十二年八月十八日のことでありました。上野國邑樂郡館林町谷越町青物問屋吉川方の出入なる運送馬車業野田芳五郎(三十)が館林町より南瓜を運送車に積みみて山田郡大間々町に送り、同町の得意先にて掛金七十餘圓を受取り、午後九時頃兩毛線鐵道山前停車場へ來かゝりし時、頰かむりせし大男背後より窺ひ寄り棍棒を揮ふ

て芳五郎の頭を撃ち倒れし上に打跨りて所持の金を奪ひ取らんとするや、運送馬車に繋かれたる馬は「ヒイン」と一聲嘶くより早く泥棒の背中に噛付き、二度目に肩先を咬へて路端の稻田へ投げ込んだので、泥棒は思ひも掛けぬ助太刀に驚きながら、ムツクと刎起さ着衣に血を滴らせながら這ふ様にして逃去つて仕舞ふた、芳五郎は痛手ながら飼馬が自分を助けて呉れたのを見て大に喜び、是れもやうく起上りて其車に乗り無事に我家へ歸りたるが、此馬は宮城縣柴田郡の産にして、七年以前より飼置き本年十一歳になり、平生は至極從順にして芳五郎が他より歸ることあれば、必ず嘶くを例とする忠義馬でありしと。

仁を履み、慈を行ひ、博く愛して衆を濟はじ、多くの譽れありて福ひ常に身に隨ふ、臥して安く、覺めて安く、惡夢を見ず、天護る人愛す、毒せず、兵せず、水に喪はず、火に喪はず、所在利を獲、死して梵天に昇る。

—法句經—

### 第十六席 勤險産を治め

#### 一 村是模範の盲目村長

愛媛縣温泉郡余土村の森恒太郎は、曾て縣會議員をも勤めた人であるが、明治廿八年三十四歳の時不幸にして盲目の人となつた、東京にも上りて種々治療に力を盡したがどうしても治らぬ、氏は泣々家に歸つたが親の顔も見られず郷土の山川草木一つとして見ることも能はず、渺たる一身は此世からなる黒暗地獄の人となつて了ふたのである悲しさの餘り幾度が死を決したこともあるが、慈悲深き母親や恩愛の切なる妻子のことを思へば、死ぬに死なれず、明けても暮れても泣いて計り居られたが、或日食事の際御飯一粒を取落した、手で撫廻はし漸く之を拾ひ上げ指の先にて其米粒を捻り居たる一刹那、忽然として一種の大覺省を得たのである。あゝ此の一粒米は人間の指の先に翻弄せらるゝ程の微小なるものである、此の微物を古人は「一粒米の重きこと須彌山の如し」といふて嚴格なる家庭では一粒米たりと雖も、粗末にすることを許さぬ。若しそこらに落居れば、必ず之を戴いて拾はせる、なぜ此一小物が古今の人に尊重

せらるゝのであらう。此小物なりと雖も、六月の炎天に照付られつゝ、生成し成熟の後鎌に刈られ、臼に搗かれ、水にて洗はれ、釜にて煮られ、漸くにして食膳に上ることを得たのである。併し此れのみにては未だ其價値を現はすことは出来ぬ。其の價値ある所以のものは此の物が他の食用となつて胎内に入り、人體の血肉となりて萬物の靈長たる人間を營養する、そこに此の物の價値が現はるゝのである、然れば吾々人間たる者は縦ひ盲目とならうとも、若し國家の爲め社會の爲め獻身的に盡したならば必ずや大なる價値を有するに相違ない、人にして豈に一粒米だにも如かざるべけんやといふ感じを起されたのである。それからといふものは今迄の煩悶は一時に消滅して前途に赫々たる光明を認むるやうになつた。是に於て或は江州の比叡山に上りて佛敎を聞き或は京都の南禪寺に參じて禪を味ひ、益々修養に努められた。村長となつてからは一層立派な仕事を致そうとの志を發したとある。

余土村は松山を距ること一里許り、四百餘戸を有する村であるが従前小作人が耕作に忠實ならざる爲めいつも隣村よりも米質が悪い、従つて村は年一年疲弊を來す様な始末である、そこで氏は第一小作人の心から矯正せんと欲し自分は暑中と雖も笠を被



らず村内を往來するには草履のみを用ひて下駄を穿かず、且つ小作人保護の資金を作らん爲め土地所有者より一段歩五升宛を出して貰ふ事とした處が中には容易に出して呉れぬ人もあるのて氏は首に袋を掛け、地主の家を廻りどうぞ願ひます、頼みますといふて三拜九拜して米を出して貰ふことも屢々ある、村の内には氏の事を盲乞食といふて悪口をいふ者も有つたが氏は少しも意に介せず、遂に三千圓の資金を作上げた、それを村役場で保管して利息を貯へ小作人の不時の困難を救ふの資となした。或時、小作人百八十餘人の總代が三四名で、氏の處に參り「村長様のお蔭で吾々も永久に安心が出来ることになりました。此御恩に報ゆる爲め向後は農作に勉強すべきは勿論、小作人一人一段歩に付麥五升づゝを差出したさに付、お聞濟を願ひたし」と申出た氏は涙を流して之を謝せられた、それより小作人の氣風が頓に革まり、米質も非常に佳良になりて今日では他村の米よりも一石に付五十錢高になつたと申すことであります。氏の如きは實に賞讃すべき人物と申すべきである。氏は一旦は病魔の爲めに身を捨て様と思ひ詰むる程の煩悶に陥つたのに全く此世からなる地獄の苦しみてあつた一朝一粒の米に感じて煩悶轉じて愉快となり、更に元氣恢復して利他的大活動を試み

たのです、同一の身を以て同一の世に處し昨は人生を悲觀し、今は趣味を感じる心念の妙用實に奇といふものであります。

### 二 工女の模範

滋賀縣栗太郡石部村字中清水町に大黒屋といふ旅宿があつて主人の名を服部平七と云ふ維新の前までは關西の諸藩士の上り下り頻繁にして、宿々の旅宿も繁昌したれど世の開明に連れて汽車汽船の交通の便宜が開け、街道筋をポツ／＼歩いて旅をする者稀で、旅宿は次第に寂れゆきさしも繁昌であつた大黒屋も、遂に家政を維持する事出来なくなつて、是非なく閉店して家族を引連れ、京都に移轉したのは去る明治二十六年中の事であつた、さて平七は京都にて何か一儲けと思ふたれど土地の勝手分らねば何をして思はしう運ばず果は其日の生計にさへ差支へ長女やす女(二十二)二女みね女(八)の二人を二條の東なる藤井紡績會社の工女に住込ませたるに姉妹とも頗る成績よく他の自墮落なる工女の惡風には少しも染まず、一心不亂に勉強して居りしが、其後二十八年の一月に至り、京都紡績會社の懇望に依つて二人を同社へ引渡したが、此處

にても矢張り職業を勵み藤井紡績を去るとき姉やす女は七圓六十一錢、妹みね女は七圓十錢の積立金を請取りたれど一錢も使はず毎月請取る工錢と共に銀行に預けしに二十九年十月に至り二人の貯蓄金二百圓になつた、然るに同年十一月父平七氏大病に罹りたれば日來の貯金を使ふは斯様な時なりと、其内五十圓を引出して醫藥に費ひ二人が心を盡して看護したる効ありて、平七氏はやがて全快したにつき、跡に残りし百五十圓にて軍事公債を買求め、その、利子を父の小遣錢に宛て、二人は相變らず紡績に通ひ居たる處三十年一月にて約束の年限が過て會社より積立金三十圓の外に二人とも五圓づゝ賞與金を貰ひ、尙約束を更めて勤め續く事になりましたが、此度は尋常の工女ではない技女と申して多くの工女を指導する役を云付られ、準つて給金も多くなりたれば其年の三月までに三百圓貯金し、前の百五十圓を合せて四百五十圓を得たれば今度は其金を資本に故郷石部に歸り、一時閉店した大黒屋の店を再興して、元の繁昌に挽回さんと姉妹二人共に勇み立ち、父平七を促がして歸國したさうである。思へば虚飾に流れ易き今の世の少女には誠に珍らしくも感ずべき二人の行ひであります。

因縁 實驗說教 (終)

大正五年七月十八日印刷  
大正五年七月廿五日發行

(定價金六十五錢)

著者

黒木顯道

發行者 東京市麻布區飯倉町五丁目四十四番地 森江佐七

發行所 東京市麻布區飯倉町五丁目四十四番地 振替東京三七二番、電話芝一二七四番 森江本店

印刷者 東京市京橋區新築町五丁目七番地 村田豊吉

發賣所 東京市本郷區春木町二丁目 森江分店

賣捌所 鴻盟社 佛教館 具樂書院 法文館 興教書院 名古屋  
光融館 誠進堂 (西) 文政堂 法藏館 顯道書院 文光堂

不許複製  
(實驗說教)

■青年、婦人、家庭、軍隊、監獄に對する  
**布教傳講演資料**の缺  
 即坐新に活用し得べく清**通俗教材**は提供せられ

高楠博士序  
 中島觀秀師序  
 新井石禪師序  
 井上盡興師著

模範  
 講話

修

養

清

談

四六版全一冊  
 定價金九十五錢  
 送料金八錢

廣汎なる佛教の眞理を、是れ迄爲し來りし専門家の如く複雑にして面倒な講釋をもせず、適當な譬喩と、古今東西に涉りて趣味ある例證をも持ち來り、一讀すれば何人にも面白く有難く判かる様に説明し、布教々育に従事せらるゝ人々に對し、嶄新なる通俗講話の資料を提供し、且は家庭の友として子女の机上に供へ、内には信念の修養を圖り、外には身を修め、家を治むる資に供せんとする著者の最も苦心せしところなり

大正布教文庫  
 第一編

足立栗園  
 先生著

教訓  
 資料

人

の

一

生

四六版全一冊  
 定價金三十五錢  
 送料金四錢

森江本店發兌略書目

電話芝局一二七四番  
 振替口座東京三七二番

加藤咄堂、大住舜、足立栗園先生編  
**布教新辭典**

洋裝全一冊  
 金圓三十五錢  
 送料二十錢

時代の進運に伴ひ嶄新の資料を要するは布教家の實驗なり本辭典は布教の最新資料を供給し和歌俳句、譬喩因縁、史蹟學說、金言世諺、教理の各方面に亘りて、蒐集し用ゐるに引とて一目の下の多岐の材料を得らるべき用意周到に布教家の材料を得るのみならず教育家必須書

加藤咄堂先生編  
**布教大鑑**

洋裝全一冊  
 金圓一十五錢  
 送料二十錢

本書は古今東西の材料を蒐集し特に現代大家の實地應用せらるゝ資料たる者を選りて、現代の實地應用に可なり得べし、布教家教育家を坐すの頭問として一日も事可からざるの珍書なり速に一本を購ふて良師友たらん事を切に進む

楫東獅々吼道人著  
**譬喩觀音說教**

美裝全一冊  
 金圓十八錢  
 送料八錢

内容極めて通俗に觀音普門品の利益を事實的に指導し人情適合救世卅三身說法を國家的に證明活示して餘温無し譬喩簡明にして功妙卑近にして通俗因縁典據明確にして聽衆を感動し易く眞理に合法して鬼神を悲泣せしむ著者は原說教學專攻の師家たり

加藤咄堂先生著  
**佛教講演集**

藥版全一冊  
 金圓七十五錢  
 送料八錢

本書は居士の最も優秀なる講演廿編を選び居士自ら註釋を施したる者にして清新の思想と幽玄の教理とは平易通俗の筆に依りて傳へられ讀者をして坐ながら居士の雄辯を聴くの感あらしむ

加藤咄堂先生著  
**最新應用說教學講義**

洋裝全一冊  
 金圓十五錢  
 送料六錢

本書は說教の目的より音聲の使用法及說教の組織、譬喩因縁の適用法は勿論、青年、婦人、監獄、軍隊等の諸傳道に關する模範を示し全編悉く修辭、論理の二宗を根本として東西各家の意見を參酌した珍書なり

加藤咄堂先生著

### 維摩經講話

洋装三冊 圓十五錢 送料二錢

本書は古來佛敎文學の一大精粹と稱されたる者にして今咄堂居士多年研究を傾けて通俗平易に是れを講解現代の思想を背景とし三千年前の維摩を活躍せしむ付するに聖徳太子義疏の全文及古來の註疏を網羅して本書の完璧を期したり禪門の名著維摩を了解せられよ

池上文僊著書

### 碧巖百則百話

新装一冊 圓一十八錢 送料二錢

玄妙深遠なる禪の奥旨を収め活潑自在なる高遠の言行を語りし碧巖集は元來讀過すべき書に非ずして考量すべき禪門第一の書と云はれて居る著者は夙に禪に悟入する事に久し今禪の妙趣をへんが爲碧巖百則を畫解し則々紙上に本來の面目を活躍し以て碧巖の根底を究むる事を得ん少室は達磨大師九年面壁の道場にして本書は大師の皮肉骨髄禪門の一大寶典なり苟も不立文字直指人心見性成佛の主旨を窺はんとする者は本書に依りて親しく禪味を了解し其第一義を知らざる可からざる珍書なり

寶山梵成編

### 少室六門

和装二冊 圓五十八錢 送料八錢

本書は坐法より調息、調息、調心の要術に至るまで懇切丁寧生理上或は學理上より開示せられたる者にて坐禪の方法を知らむとするの士は先づ第一に讀了し滋養を究むべき良書なり

神谷篤倫著

### 精神禪の要術

洋装一冊 圓五十四錢 送料六錢

本書は坐法より調息、調息、調心の要術に至るまで懇切丁寧生理上或は學理上より開示せられたる者にて坐禪の方法を知らむとするの士は先づ第一に讀了し滋養を究むべき良書なり

達磨耶庵著

### 通俗參禪の活路

洋装一冊 圓五十五錢 送料六錢

本書は禪の奥義を捉て尤も平易に最も簡明に社會、國家に放光動地頭如として顯はれ煩悶せる者は禪の慰安を與へ死生岸頭に迷ふものには葛直に殺活の自在を與ふこと本書の特色なり

横尾賢宗老師著

### 勤坐禪儀十回講話

洋装一冊 圓十二錢 送料四錢

禪の趣味を知り禪の根本淵源を通俗平易に一般人士に満足を與ふるは本書の特色にして老師が極めて平易に丁寧親切に通俗的に而も簡にして明瞭に講話せられたれば禪の趣味を知ると共に大悟徹底の人となれ

神谷篤倫師編

### 新引導法語軌範

洋装一冊 圓五十九錢 送料八錢

本書は開卷に引導起源の要を掲げ本書を季節門、應用門附門に大別して更に出家在家の二部として十二月に分類し應用自在なる數百種皆原文に和譯を對照し最後は名を引を加へ總して數百種皆原文に和譯を對照し最後は名を引を實に模範的引導法語全集たり

岸和田一雄師編

### 訂正洞上佛事編

和装二冊 圓一十錢 送料八錢

本書の上巻は洞宗佛事法式に關する三十餘有の大禪智識の諸法語中其特を摘録したるもの晋山、開堂、結制、退院等より引導、施餼、鬼會、般若、入佛、歎佛等は勿論祭文、塔婆銘文、畫像贊辭に至る迄洩さず下巻には其作例軌範を示して應用自在ならしめたり

竺山默禪師著

### 曹洞修證義引導法語

洋装寸珍 圓二十錢 送料二錢

曹洞宗祖道元禪師の暖皮肉は正法眼藏にして其の金玉の精粹を抜抄して在家化導の寶典となりたるは修證義なり此修證義の其精神を基として引導法語を撰びしは實に本書にして洞門の大導師は日常懷中して應用せよ

萬仞禪師述

### 禪戒鈔

和装一冊 圓十二錢 送料四錢

佛祖正傳、祖々受授し來れるものにして永祖之れ淨祖に受け扶桑に光濟すること二十餘年門人環葬師之れを録して教授戒文と云ひ加ふるに經家禪師梵網と合せ鈔し禪戒の要旨を明らかなり

町元吞空師編

### 增註信心銘夜糖水

和装二冊 圓五十八錢 送料八錢

禪僧恒山三祖大師の信心銘により大に悟る處あり由て之れが釋をなす、之本書の題目なり、中には眞歇の拈古本祖國師の拈提も亦附して研究者の便に供ふ、禪の支那に於ける状態を知らんとせば本書に由らざる可からず

禪門の三書

### 佛祖三經指南

和装一冊 圓十四錢 送料六錢

本書は四十二章經、佛遺教經、僞山警策の三書を稱して佛祖三經と稱す内容は高尚幽遠に非ずして皆日用痛切の訓誨にして浮情を防ぎ邪業を誡む佛敎研究の初門にして又實訓なり

洪川禪師著

正受老人崇行錄

古田梵仙師編

冠註曹洞二師錄

古田梵仙師編

增冠永平大清規

橫綴假名附

禪林句双紙

木宮惠滿編

冠註一鹹味

吉田義山編

頭書普觀坐禪義合本

簡註坐禪用心記合本

和正價金料送  
一全裝  
錢十三金料送

和正價金料送  
二全裝  
錢五十六金料送

和正價金料送  
二全裝  
錢五十八金料送

和正價金料送  
二全裝  
錢五十四金料送

和正價金料送  
一全裝  
錢十四金料送

和正價金料送  
一全裝  
錢五十四金料送

禪門の碩徳、惠端禪師一代の崇行と師の垂語と偈頌とを編纂せるものにして千古の金言たり、本書一たび繰りば禪師一代の人格を窺ふて直ちに悟入する事を得ん。

禪門の大徳たる洞山良价禪師、曹山元證禪師の兩高僧の一代に於ける語録を集録せしものにして禪學研究の士は一たび本書によりて參すべきの書たり

曹洞宗の開祖道元禪師の著にして典座教訓、辨道法を詳らかに尤も懇切に示され、知事清規、佛家の業務の尤も貴きこと、對大己卷の心得を説かる、衆寮箴規は禪堂に於ける箴規を述べられ、禪門に於ける必須の書たり

本書は禪門書中の句を集輯せしものにして衲家は勿論書道家は題贊等に缺く可らざる良材たるは滿天下の知る所にして此に喋々を弄すは却て本書を傷くるものと謂ふ可し禪室、孤燈の下に一讀して益々禪味を味ふべし

本書は舊來、四部録と題したり冠註を加へて一鹹味と改題せしものにして本書載する處、坐禪義、十牛圖、信心銘、證道歌を合冊して禪の眞髓を研究せんとするものにして詳細なる冠註及傍註を加へて諸士に提供したるもの本

本書は共に坐禪觀とも云ふ可きものにして坐禪の要義其儀式方法用心觀法の對境悟入の状態等總べて餘蘊なし前者は道元禪師の著にして、後者は瑩山禪師の著されたる坐禪第一の書なり

伊藤俊道師著  
釋迦實傳記

大崎龍淵師著

白隱禪師傳

小野藤太先生著

弘法大師傳

佛教獎學研究會編

史談西行法師

本多無外先生譯

釋尊物語

望月信享先生著

法然上人正傳

洋定價料送  
一全裝  
錢五十七金料送

洋定價料送  
一全裝  
錢五十四金料送

洋定價料送  
一全裝  
錢五十四金料送

洋定價料送  
一全裝  
錢十三金料送

洋定價料送  
一全裝  
錢十五金料送

洋定價料送  
一全裝  
錢十五金料送

世に釋尊傳記種々あるも本書は著者廿餘年の間一切藏經を眞寫して釋迦の悲智圓滿なる事實の徳想をものしたる者にして御降誕より成道涅槃に至る迄詳細に述べられたる者文章平易にして眞に實傳記に誤らず

駿河には過ぎたるものが二ツあり、一に富士山二に原の白隠と、師は實に日本の達磨大師なり其の徳其の學其の體、近代禪林普く高風を仰ぐ禪風に浴するものと否とを問はず先づ本師の傳を熟讀玩味すべきなり

日本文明の祖師と謳はる、大師と云ふは即ち弘法の獨占を意味す、此の大人物に對して未だ組織的に乏し著者之を概し普く史料を交渉して本書一卷を大成す

西行法師の出家から大往生迄を十二席で法師の生涯を話して一席毎に説教を仕組んだ至極面白い且つ頗る巻文句調であるから言葉が自然華やかである故に一たび繰りかへてはいつの間にか巻を終つて仕舞ふと共に傳記が自然に暗誦せられる

本書は少年少女の讀物として叙述せられたるものにして實に面白く釋尊に一代記の事蹟が能く了解出來得る様に述べられたる名著にして文章は頗る平易なれば少年少女の讀本として實に適當の良書たり

上人の傳記は古來十數種ありと雖も記載の事實中疑似に亘るもの少からず本書は著者十數年内外の諸典に就き研究せられたる最も確實にして信憑するに足るべき史料に基き著述せられたるものなれば實に傳記中最も正確たるを證して餘りあり



荒井涙光先生編  
**明治因縁大鑑**

洋装一冊 定價 錢廿圓一錢八分

尤も熟望せられつゝある明治現代の新事實因縁談はあらゆる方面に亘りて多種多様な趣味に富み、深遠に蘊蔵せられたるは本書に依りて實際問題に於ける三世因果の理を究め説教に演説に布教傳道に顧問たる本書を備へよ

黒木顯道老師著  
**譬喩實驗說教**

洋装一冊 定價 錢五十六錢六分

時代の進運につれて説教演説の方法も改まらねばならず、更らに其材料も嶄新たらざる可らず、此の要求を満さんのが爲に現はれたるは本書なり、著者が多年蘊蓄せる布教の實験を公開せるものにして、至理を卑近に寓して譬喩の巧妙新なる因縁を應用し其儘教壇に用ひて自由白

岸上恢嶺師著  
**說教帷中策**

和装二冊 定價 錢五十五錢八分

著者は布教家の泰斗たり、彌陀を中心として渴仰信念の妙心をして語調の流麗なること本書に及ぶ者なし、されば各宗を問わず本書を参考書として一讀せざるもの無しと云ふ可きの珍書たり

中島觀秀老師著  
**圓光大師御傳說教**

洋装一冊 定價 錢十四錢八分

本書は多年の實験に依りて著述せられたる者にして大師御一代の芳躅に採り淨土宗の安心起行を詳説して他力易行の法門を細叙す行文流暢通俗平易に述べられたれば應用自在直に是を布演するを得べし

磐寮輯錄  
**說法因縁除睡鈔**

和装三冊 定價 錢十五錢六分

本書が説教演説の錦囊として最要の材料集として定評あり、五倫の部、五根の部、五惡の部、五惑の部、雜部、鬼畜の部、忠臣、父母、夫婦、兄弟、眼根、鼻根、舌根、味、殺生、偷、盜、妄語、飲酒、茶茗、賭博、因縁疑、信、好嗜、圍碁技藝、嫉妬、占相、著百數十種

大貸良宜師著  
**說教良材集**

和装二冊 定價 錢五十四錢六分

本書は説教家の良材となる可き譬喩因縁にして歴史上確實なるものゝみと和漢に渉り數十種を粹録し加ふるに法説を加へて注釋を試みられたるものなれば布教に従事せらるゝの士は参考として一本を座右に備へられよ

山田意齊叟述  
**西國三十觀音御詠歌略註**

和装一冊 定價 錢五十四錢四分

本書は觀世音經の教義に基いて最も解し易き様に西國卅三所の御詠歌を註釋して觀世音菩薩の利益廣大なる事を詳説してあります加ふるに最初に觀世音を大字に平假名を添へ且つ順拜道程を委しく記入してあります

新まじない  
**選咒咀調法記大全**

寸珍一冊 定價 錢四十四錢

本書は「いろは」順によりて一切の「マジナイ」を網羅したる者にて疾病、火傷、安産、虫よけ、等無根幾萬の不出の出來事に逢ひしときの咒法あり一本を座右に備へば頗る調法便利の至極必要の書たり

隱元大禪師著  
**觀世音靈感吉凶卜占考**

和装一冊 定價 錢十二錢四分

本書は隱元禪師觀音の靈感に依りて著し給ふ占法にして目のあたり吉凶を占ひ縁組旅行公事等の種々の善惡を知る事の妙法を得るの便書なり其占ひ方は銅錢五つを以て更らに工夫も入らず童幼と雖も容易に占ふ事が出來ます

吉堀慈恭師著  
**四恩略辨**

和装一冊 定價 錢十二錢四分

四恩は世間的佛教道德の基礎なり、佛教を信する者と否とに論なく、必ず四恩の道理を解せざる可らず、本書は吉堀僧正が四恩に就きて最も明瞭に最も懇切に解説せられたる書各宗の道俗を問わず一讀を要す

紀秀信畫  
**増補諸宗佛像圖彙**

和装五冊 定價 錢十七錢八分

本書は和装全五冊より成る者にして、各宗尊像、觀音、羅漢、各尊者は勿論、祖師に至る迄掲載せらる、佛に志さす者、畫工、佛師は是非座右に備へざる可らず

折本仕立  
**佛法双六**

和装一冊 定價 錢五十二錢二分

古來多種の双六あるも佛教双六の如く、教育的道德的宗教的なるもの他にあらざるなり、本書は進路を二つに取リ一を善道、他を惡道とし、童幼をして知らずく佛教の階級をして其道を指示せるものは本双六なり

佐田介石先生著

### 佛敎創世記

佛敎界に於て有名なる佐田介石師が世人の耶蘇敎に創世説あるを知りて、佛敎に創世説のあることを知らざるの徒輩あることを慨して著述せられたるは本書なり

執筆大家肖像挿入

### 眞名家佛敎講演集

我思想界の一角に他力信仰の旗幟を以て雄視しつゝある眞宗なり本書に執筆せられたる諸大家は鳥地黙雷、齋藤唯心、佐々木月樵、南條博士、菅野芳英、鳥地大等、齋前田慧雲、近角常觀、上杉文秀、加藤咄堂、各先生の金科玉條にして坐ながら大家の講演を聴くが如し

近角常觀先生著

### 人生と信仰

現代の思想界の亂調は、律法的教訓若くは、物質的施設を以て根治すること難かるべし。獨り信仰により根本的に自覺して初めて解説せる眞人生に入ることを得ん、是本書なるの所以なり

東京眼科病院長井上豊太郎先生著

### 強眼法

眼病を恐るゝ人眼病に罹れる人は勿論未だ眼病を知らざる人も此の簡易新式の治療法を讀め眼を愛ふ事無し、内容は眼の力、美しき眼、強き眼、鈍き眼、弱き眼、不具根本的療法等、眼の按摩、眼の運、眼の沐浴、特別運動

東京坂田病院院長先生著

### 健腦法

此の健腦法に依りて救われたる人已に幾千人學生諸君が之に依りて益する所の多大なるは素より言を俟たず乞ふ此法の簡明にして適切なる健腦強腦の新法を讀み先生を健腦も其効確實なるは多言を要せず

横山文彌先生譯述

### 肺病自然療法

肺病とは、何ぞ肺病は不治なるか、肺病は如何にして治す可きか、空氣療法等の數節に分ちて懇切に其療法を教ゆる、人は試れるもの恐るゝ處を聞き給ふ可し極めて通俗平易に詳述せらる

和装正金價五錢二錢送料

洋装正金價五錢四錢送料

寸珍全一冊正金價三錢四錢送料

寸珍全一冊正金價二錢二錢送料

寸珍全一冊正金價二錢二錢送料

寸珍全一冊正金價二錢二錢送料



328  
134

終